

シロツメグサ（豆花）



ヤブレカサ（兔児草）



《小坡の誕生日》 老舍

（四） 庭にて（1）

残念なことに、お正月も普通の日と同じように、あっという間に過ぎてしまった。父さんはまた店に仕事に出かけ、母さんはたくさんの料理を作らなくなり、^{チェン}陳おばさん相変わらず一日に十八時間眠り、少しも笑顔を見せなくなった。父さんがくれたおもちゃにも少し飽きがきて、その上、^{センポー}仙坡のおもちゃのカップが一個無くなってしまった。^{シャオポー}小坡の汽車は脱線してしまい、想像上の乗客がかなり負傷してしまった。

母さんと兄さんは外出し、陳^{チェン}お婆さんは二階で寝ている。小坡^{シャオポー}は思い切り急行を走らせようと、汽車とプラットホーム、線路を抱えて庭に走り出た。庭に出ると、仙坡^{センポー}が一人で垣根のそばに座り、地面に薄黄色のシロツメグサを置いて花輪を編んでいた。

「仙、何してるんだい？」

「二喜^{アルシー}に花輪を編んであげてるんだよ」

「編まなくていいよ。花は汽車に載せて、荷物運びごっこをして遊ぼうよ」

「それもいいね。どこからどこまで運ぶの？」

ほんとうは小坡がどう答えるか知っていたのだが、仙坡はわざと尋ねた。

「ここからクアラルンプールまでだよ。いいかい？」

父さんは用事があってクアラルンプールに行くときにはいつも汽車に乗っていた。それで小坡は、すべての汽車はクアラルンプールに行くもので、クアラルンプールがなければこの世で線路を作る必要がない、と思っているようだった。

「わかった、じゃあ荷物を載せる」と仙坡が言った。

二人はシロツメグサをひとつひとつみんな汽車に載せた。小坡は線路をきちんとつなぎ何度も往復させ、それから停車させ、花を下ろし、また載せ、何度か往復させ、また下ろし、積んだ……だんだんと花は二人の手にもまれてだらりとなり、汽車も走れば走るほど具合が悪くなった。

「仙坡、もうこんな遊びはやめようよ」

「何するの？」

仙坡は急にはアイデアが思いつかなかった。小坡は後ろで手を組んで何度か行ったり来たりし、やっと思いついた。

「そうだ、南星^{ナンシン}とか三多^{サンドウオ}とか、みんな呼んでこようよ。どうだい？」

「お母さんから叱られないかな？」

「母さんはいないよ。待ってて、ぼく、呼んでくるよ」

すぐに小^{シャオポー}坡は、マレーシア人の少女二人、インド人の男の子二人と女の子一人、福建人の男の子一人、女の子一人、太った広東人の男の子の団を連れてきた。マレーシア人の少女二人は同じようなかっこうをしていた。二人とも立ち襟の白い上着にもよう入りの筒状のスカートをはいていた。髪は上のほうで結んで^{きね}杵のようなまげを結っていた。^{はだし}裸足で両足首に金の輪の足飾りを付けていた。彼女たちは双子の姉妹で、見かけがほとんど同じだった。背も同じ高さで、二人ともおっとりしていて慌てることがなかった。遊ぼうが遊ぶまいが彼女たちには何の関係もない、といった感じだった。あまりおしゃべりではなく、動き回ることもなかった。ただ二人で手をつないで、小さな声で、どちらが姉でどちらが妹か、と言い合っていた。二人ともまったく同じで、どちらが姉でどちらか妹かはっきりと自分たちにもわからなかったのだ。

二人のインドの少年は、腰に丈の短い赤い布を巻きつけているだけで、何も着ていなかった。彼らの手、足、背中は少し色が黒く、とても柔らかくてすべすべして、光っていてきれいだった。インドの少女も赤いスカートを着ていたが、大きなスカーフを前から掛け、両端を背中の方に垂らしていたが、その姿がとても垢抜けていておしゃれだった。

二人の福建人の男の子は、袖の広い黒い上着、幅の広いズボンというかっこうだった。女の子のほうは髪を一つにしていろいろな色の紐を結んでいた

広東人の太った少年は半ズボン^はを穿いているだけだった。腕が太く足も太っていて、両目はきょろきょろとして落ち着かなく動き、見るからにいたずら小僧のようだった。

みんな一様に靴を履いていなかった。福建人の少年は、父親が革靴店を開いていたのだが、やはり^{はだし}裸足だった。

みんな木の影に立っていたが、誰も何をして遊んだらいいかわからなかった。
広東人の少年、太っちょの南星が、小坡の汽車をちらりと見てとつぜん銅鑼の
ような声で言った。

「汽車ごっこをして遊ぼう！ おれが運転する！」

そう言うや彼はすぐに汽車を抱え、もう絶対に汽車を手放さないぞといわんばかりだった。

「クアラルンプールに出発！」小坡はしかたなく南星に汽車を渡しておくしかなかった。なんと言っても、南星だけが実際に汽車に乗ったことがあり、それに汽車の中でカレーを食べたことがあるからだ。汽車に乗ったことのある者は当然、どうやって汽車を走らせるか知っているので、小坡はただ引き下がるしかなかった。インド人の少年の父親はシンガポール駅で切符を売っていた。それで彼らが叫んだ。

「ここで切符を買うんだよ！」

(いまみんなはマレー語——南洋の「世界語」で話している。)

みんなはそれぞれヤブレカサ(兔児草)を引き抜いて、切符を買うお金にした。

「待って。人が多すぎるとめちゃくちゃになるから、ぼく、巡査になるよ！」

小坡は巡査になり、前に出てきてみんなの列を整えた。

「先に女が買うんだ！」

少女たちはみんなヤブレカサを持ってきて二人のインド人の少年に渡し、彼らは一人に一枚、切符に見たてた葉っぱを渡した。

みんなが切符を手に入れた。二人の切符売りのインド人の少年も、自分の左手で右手にヤブレカサを渡し、右手で左手に葉っぱを渡した。

みんなは南星の後ろに二列に並んだ。南星は声を張り上げた。「しゅっぱーっ！」

それから両足を曲げてかがみ、片手に汽車を持ち、もう一方の手を円を描くように前後に回し、足で地面をこするようにして進み、口の中では「ガタンゴトン、ガタンゴトン」という声を響かせた。

汽車は動きだした！

後ろの旅客もみんな足を曲げてかがみ、足で地面をこすりながら進み、両手を前後に回し、ガタンゴトンと言いながら庭を一周した。「カレーを食べるんだ！カレーを食べないと汽車に乗ったことにはならない！」

それでみんなは、片手を車輪のようにぐるぐる回し、片手を口に運んでカレーを食べているような振りをした。このような状態でまた庭を一周した

汽車はだんだん速くなっていった。南星の後ろにいるマレーシア人の少女は、スカートは長く体力もないので、だれがお姉さんでだれが妹なのかという議論はもうやめ、息をはあはあいわせながら、「いつになったら着くの？」と聞いた。

「クアラルンプルはまだ先だよ。到着時間になったら、当然ぼくがみんなに知らせるよ」と、小坡^{シャオポー}は後ろのほうから叫んだ。

「何だって？ さっき買った切符はジョホールパルまでしか行けないよ」

二人のインド人の少年が驚いたように言った。「仕方ないな。みんな精算するしかないよ」

こう彼らに向かって言いながら汽車から飛び降りると、二人はみんなからお金を徴収しはじめた。だが、みんなはお金を持っていなかった。それでみんなも汽車から飛び降りて、塀のところに行ってヤブレカサを引き抜いた。南星は一人で汽車を抱えて「ガタンゴットン」と言いながら、庭を一周した。

汽車は再び満員になった。力がいったいどこから湧いてきたのかわからなかったが、みんながまた乗車したのだ。

汽車は前よりも速く走りだした。マレーシア人の少女は長いスカートを手で持ち上げ、頭の上に結ったまげを前後にトントンと揺らしながら一生懸命に走った。とうとうスカートの裾が足にからまって、二人ともいっしょに前につんのめり、運転手の背中にかぶさった。後ろの乗客も足をきちんと出すことができず、一緒に前につんのめった。だが、ずっと「ガッタンゴットン」とつんのめりながら走った。仙坡センポーのおさげはマレーシア人の少女の足に巻きつき、かかとはインドの女の子の鼻先に当たったが、それにはかまわず、「ガッタンゴットン」と小さい声で言いつづけていた。「貨車に変えよう。そしてこんなふうにはは這っていこうよ」と小坡シャオポーがアイデアを出した。彼は貨車を見たことがあった。客車は一つ一つが小さな部屋のようにになっているが、貨車はほとんど屋根がなく、低い車両になっている。みんなはいま前につんのめって低くなっているから、貨車にするのがふさわしい。「しゅっぱ一つ！」

南星ナンシンはまた一声上げて、這いながら前に進んだ。汽車はもうどこかに放り投げていた。みんなは手と足を使って彼に着いていった。

子猫アルシーの二喜もやってきて、後ろから追いかけてきた。二喜はみんなより軽々と走り、少しも苦労しなかった。

小坡が着いたと言わない限り、この汽車が永遠にクアラルンプールに着かないのは当然のことだった。それがどこにあるか知っているのは小坡シャオポーだけだったからだ。(実は小坡はそこまで行ったことはなかった。父さんがいつもそのことを話していたから、自分はクアラルンプールと関係があるのだと思いこんでいただけなのだが。) だが、小坡はわざと着いたと言わなかった。それでみんなは前に向かって這いつづけた。

南星は小坡のプラットホームが垣根のしたに置いてあるのを目にした。彼は「しゅっぱ一つ！」と声を上げそこを通りすぎ、「到着！」と叫び、あえぎなが

ら地面に倒れて横になった。みんなも倒れた。クアラルンプールに着いたかどうか、もうどうでもよかった。小坡はまだ目的地に着いてはいないことを知っていたが、それ以上^は這う力は残っておらず、ただ「ガッタンゴットン」と言いながら、動かないでいるしかなかった。

みんなはどのくらい横になっていて元気を取り戻したのかわからないが、まず二人のマレーシア人の女の子が立ち上がった。頭上のまげは片方に傾き、額には^{たま}珠のような汗が流れ顔を赤くしていたが、それが二人をさらにかわいく見せていた。二人は小さな声で言った。「もう遊ばない！ 汽車に乗るのは道路を歩くよりずっと疲れるんだもん。これからもう汽車にはぜったい乗らない！」

^{シャオポー}小坡はあわてて立ち上がり二人を止めた。まだクアラルンプールには着いていないのだが、二人が乗りたくないと言っているので、ほかの遊びを考えるしかなかった。二人は小坡の必死の説得を聞き入れ、手をつないで座った。^{センポー}仙坡は頭を上げて、どちらがお姉さんでどちらが妹なのかと尋ねた。それで二人は、いまだ解決をしていないこの問題を考えはじめ、家に帰るのを忘れた。

「そうだ、笑い話をしようよ」と、小坡がアイデアを出した。

みんなは足を前に投げ出し、輪になって座った。たくさんの足の指が、蜂の巣のようにぎゅうぎゅう詰めになって寄り集まった。

「だれが先に話す？」小坡が聞いた。自分が先に話すという度胸のある者はだれもいなかった。「親指がいちばん小さい者が先に話すことにしよう」と福建省の^{サンドゥオ}少年三多が提案した。

「いいね！」仙坡は自分の足が小さいことはよく知っていたが、笑い話をとても聞きたかったので、手で足を隠しながらこう言った。

^{ナンシン}南星もみんなから「話せよ」と言われる前に、みんなの親指をつまみながら、おばあさんがバナナを選ぶように点検をはじめた。その結果、二人のマレーシア

人の少女の親指がいちばん小さいということになり、みんなが拍手して、彼女たちが笑い話をしてくれるのを待った。

二人の少女の顔はさらに赤くなり、互いの顔を見ながら、何を話せばいいのか、だれが先に話すかと小さな声で言い合い、姉さんのほうが先に話すことになったが、もともとどちらが姉さんなのかははっきりしていなかったのだから、二人が一緒に話そうということにした。彼女たちは地面を見ながら、手で足飾りの輪をなでながら、同時に小さな声で話しはじめた。

「あるときね、あるときね、一頭のトラいました……」

「違うよ、トラじゃない、ワニよ」

「ワニじゃない、トラよ！」

「トラじゃない、ワニ！」

一人はトラと言わずにはいられないし、一人はワニと言わずにはいられなかった。姉妹はだんだん興奮してきた。頭上のまげは一緒に倒れ、みんなの耳にはただ「トラ、ワニ、トラ、ワニ」だけしか聞こえていなかった。

^{ナンシン}南星が拍手をしだした。南星はとても面白いと思ったのだ。いつも人が話す笑い話は長くて複雑でまわりくどいし、聞いてもよくわからない。ほら、彼女たちの話しはとってもわかりやすい。トラとワニだけで、ほかのことは出てこない。これはいい！ 一生懸命拍手しろ！

^{センポー}仙坡はマレーシア人の女の子二人がけんかをするのではないかと思った。それで、一人がトラの話しをして、その次に一人がワニの話しをしてはどうかと勧めた。しかし彼女たちは聞きいれなかった。一緒に話さなければいけない。なぜなら彼女たちはこの二つの笑い話を一字も間違いなく覚えているのだが、一人で話すとになると、どうしてもそら詰んじて言えないのだ。

みんなはこの状況を見ると、これは良くないと考え、「自分が話す」といっせいに手を挙げた。小坡が「何を話すのだ」と彼らに尋ねると、みんなは手を下ろして何も言えなかった。最後にまた小坡が、二人には後で話してもらうことにして、まず妹の仙坡に一つ話してもらおうと言った。実は仙坡の笑い話は、彼は何度も聞いてよく知っているのだが、妹をとっても好きだったから、彼女を推薦したのだ。みんなは、はたして聞いて理解できるかどうかはわからなかったが、また一斉に拍手をした。インド人の少女は拍手の仕方がわからなかったので、手で足の裏をたたいた。だが、心の中で「どうして自分の拍手は他の人のように音が大きくひびかないんだろう」と疑問を感じていた。

仙坡はみんなが拍手して聞いたがったので、とても感激していた。しかし、自分の口は小さいので、よく話せるかどうか心配だと声明を出した。みんなはそんなのは理由にならないとみなしたし、南星は、口が小さくてもバナナは食べられるが思い切りは食べられない。笑い話しを話すには口が小さいのは口が大きいものよりはいいかもしれない、自分の口は大きい物語を話すことは永遠にできない、というようなことまで考えていた。

仙坡はとてもかしこまった様子で、彼らの要望を受け入れた。みんなは息をひそめて待っていた。仙坡は首を回して半分熟している椰子の実のついた木をながめ、おさげに結んだ赤いひもをさわり、足の甲のほくろを触った。南星はすぐに笑い話が始まるのだと思っていたので、すぐに手をたたいた。小坡はちょっと不愉快になって、足の指で南星の太った腹をつねった。南星はすぐに拍手をやめた。

仙坡は話しはじめた。

「あるときね、^{よつめ}四目のトラがいました……」

二人のマレーシア人の少女と一人のインド人の少女は同時に言った。「トラはみんな目が二つだよ！」マレーシアもインドもトラが住んでいる地域なので、彼女たちはよく知っていたのだ。仙坡は口をとがらせて怒った。「もう話さない！」

インド人の少女はちょっと悪いなと思って急いで言った。「トラが二匹いたんだよ。それだったら当然目は四つだよ」

「ちがう！　トラは一匹で四目なの！」仙坡の態度はかたくなだった。

マレーシア人の少女は低い声で言った。「四目のトラはどこで大きくなったんだろう。首の上かな」と言って、口を押さえて小さな声で笑った。

センポー

仙坡は答えられず、彼女たちをじっとにらみつけていただけだった。

サンドゥオ

三多はとつぜん一時的に賢くなった。仙坡に代わって言った。「めがねをかけたトラは四目だよ！」

ナンシン

南星は話しの内容がわからなかったが、ただわからないのも面白いと思って、また拍手した。

仙坡は話さなかった。シャオポー小坡は何かおもしろい話しをして困っている妹を助けようとおもったが、どうしてだかわからないが、四目のトラの話し以外に何も思いださなかった。

みんなはインドの少女に話をしてくれと言ったが、彼女もトラの話しをして、半分話しただけで残りを忘れてしまった。

このとき、みんなも何か話したかったが、頭の中にはトラしか入っていなかった。トラ、トラ、トラで、だれも新しいことを思いつかなかった。

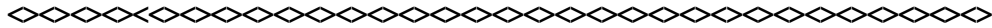
最後に南星が自分を推薦して、みんなに話しをしだした。

「あるときね、四目のトラがいました。それと六つ目のトラがいました。それと七つ目のトラがいました」

六つ目までくると、彼の「二進法」の知識が尽きたので、一つ一つ足していくこ

としかできなかった。そしてずっと言ってきた「十八目のトラがいました」まで言ったとき、この後は五十なのか十二なのかわからなくなった。

どうしても思い出せなかったので、あきらめて骨組みだけの話にすることにして、とつぜん話しをお終しまいにした。もしここで南星が自分で拍手をしなかったなら、だれも彼が話し終わったということに気が付かなかっただろう。



(中国語原文)

(四) 花园里

可惜新年也和别的日子一样，一眨巴眼儿就过去了。父亲又回铺子去做生意，母亲也不做七碟子八碗的吃食了，陈妈依旧一天睡十八点钟觉，而且脸上连一丁点笑容也没有啦。父亲给的玩意儿也有点玩腻啦，况且妹妹的小碗儿丢了一个。小坡的火车也不住的出轨，并且摔伤不少理想中的旅客。

妈妈和哥哥都出了门，陈妈正在楼上做梦。小坡抱着火车，站台，轨道，跑到花园中，想痛痛快快地开一次快车。到了园里，只见妹妹仙坡独自坐在篱旁，地上放着一些浅黄的豆花，编花圈儿玩呢。

“仙，干什么呢？”

“给二喜编个花圈儿。”

“不用编了，把花儿放在火车上，咱们运货玩吧。”

“也好。从哪儿运到哪儿呢？”妹妹问，其实她准知道小坡怎么回答。

“从这里运到吉隆坡，好不好？”

父亲常到吉隆坡去办事情，总是坐火车去，所以小坡以为凡是火车都要到吉隆坡去，好似没有吉隆坡，世界上就根本没有修火车路的必要。

“好，咱们上货吧。”妹妹说。

兄妹俩把豆花一朵一朵地全装上车去，小坡把铁轨安好，来回开了几趟；然后停车，把花儿都拿下来；然后又装上去，又跑了几趟，又拿下来；又装上去……慢慢地把花儿全揉搓熟了，火车也越走越出毛病。

“仙，咱们不这么玩啦。”

“干什么呢？”妹妹一时想不出主意来。

小坡背着手儿，来回走了两遭，想起来了：“仙，咱们把南星，三多，什么的都找来，好不好？”

“妈妈要是说咱们呢？”

“妈妈没在家呀！仙，你等着，我找他们去。”

不大一会儿，小坡带来一帮小孩儿：两个马来小姑娘；三个印度小孩，二男一女；两个福建小孩，一男一女；一个广东胖小子。

两个马来小姑娘打扮得一个样儿，都是上身穿着一件对襟小白褂，下边围着条圆筒儿的花裙子。头发都朝上梳着，在脑瓜顶上梳成朝天杵的小髻儿。全光着脚，腿腕上戴着对金镯子。她们俩是孪生的姊妹，模样差不多，身量也一般儿高。两个都是慢条斯理，不慌不忙的，似乎和他们玩不玩全没什么关系。她们也不多言，也不乱动，只手拉手儿站在一边，低声的争辩：谁是姐姐，谁是妹妹，因为她们俩一切都相同，所以记不清谁是姐，谁是妹。

两个小男印度，什么也没穿，只在腰间围着条短红裙。他们的手、脚、脊梁，都非常的柔软，细腻，光滑；虽然是黑一点儿，可是黑得油汪汪的好看。那个印度小妞妞也穿着一条红裙，可是背上斜披着一条丝织的大花巾，两头儿在身旁搭拉着，非常潇洒美观。

两个福建小孩都穿着黑暑凉绸的宽袖宽腿衣裤。那个小姑娘梳着一头小短辮，系着各色的绒绳。

广东的胖小子，只穿着一条小裤叉。粗粗的胳膊，胖胖的腿，两眼直不棱的东瞧瞧西看看，真象个混小子。

大家没有一个穿着鞋的，就是两个福建小孩——父亲是开皮鞋店的——也是光着脚丫儿。

他们都站在树阴下，谁也不知道干什么好。南星，那个广东胖小子，一眼看见小坡的火车，忽然小铜钟似的说了话：

“咱们坐火车玩呀！我来开车！”说着他便把火车抱起来，大有不再撒手的样儿。

“往吉隆坡开！”小坡只好把火车让给南星，因为他——南星——真坐过火车，而且在火车上吃过一碗咖哩饭。坐过火车的自然知道怎么驶车，所以小坡只好退步。

两个印度小男孩的父亲在新加坡车站卖票，于是他们喊起来：

“这里买票！”

（现在他们全说马来话——南洋的“世界语”。）

大家全拔了一根兔儿草当买票的钱。

“等一等！人太多，太乱，我来当巡警！”小坡当了巡警，上前维持秩序：“女的先买！”

小姐儿们全拿着兔儿草过来，交给两个小印度。他们给大家每人一个树叶当做车票。

大家都有了车票，两个卖票的小印度也自己买了票——他们自己的左手递给右手一根草，右手给左手一个树叶。

他们全在南星背后排成两行。他扯着脖子喊了一声：“门！——”然后两腿弯弯着，一手托着火车，一手在身旁前后地抡动，脚擦着地皮，嘴中“七咚七咚”地响。

开车了！

后面的旅客也全弯弯着腿，脚擦着地，两手前后抡转，嘴中“七咚，七咚”，这样绕了花园一圈。

“吃咖喱饭呀！不吃咖喱饭，不算坐过火车！”驶车的在前面嚷。

于是大家改为一手抡动，一手往嘴里送咖喱饭。这样又绕了花园一遭。

火车越走越快了，南星背后的两个马来小妞儿，裙子又长，又没有多大力气，停止了争论谁是姐，谁是妹，喘着气问：“什么时候才能到呢？”

“离吉隆坡还远着呢！到了的时候，我自然告诉你们。”小坡在后面喊。

“什么？到吉隆坡去？刚才买的票只够到柔佛去的！”两个小印度很惊异的说：“没有别的法子，只好还得补票。”说着他们便由车上跳下来，跟大家要钱。都没带钱，只好都跳下去，到墙根去拔兔儿草。南星一个人托着火车，口中“七咚七咚”地，绕了花园一遭。

火车还跑着，大家不知道怎么股子劲儿，又全上去了。

车跑得更快了！马来小姑娘撩着裙子，头上的小髻向前杵杵着，拚命地跑。到底被裙子一裹腿，两个一齐朝前跌下去，正压在驶车的背上。后面的旅客也一时收不住脚，都自自然然地跌成一串；可是口中还“七咚七咚”地响。仙坡的辫子缠在马来小妞的腿上，脚后跟正顶住印度小姑娘的鼻子尖，但是不管，口中依旧念着“七咚七咚”。

“改成货车啦！就这么爬吧！”小坡出了主意。他看见过：客车是一间一间的小屋子，货车多半是没有盖儿的小矮车。那么，大家现在跌在地上，矮了一些，当然正好变做货车。

南星又“门！——”了一声，开始向前爬，把火车也扔在一边。大家在后面也手脚齐用的跟着。

小猫二喜也来了，跟在后面。它比他们跑得轻俏了，一点也不吃力。

小坡不说话，自然永远到不了吉隆坡。因为只有他认识那个地方。（其实他并没到过那里，因为父亲常提那里的事儿，小坡便自信他和吉隆坡很有关系似的。）可是他偏不说，于是大家继续往前爬。

南星忽然看见小坡的“站台”在篱旁放着，他“门！——”了一声，便爬过去。喊了声：“到了！”便躺在地上不住的喘气。大家也都倒下，顾不得问到底是不是到了吉隆坡。小坡明知还没有到目的地，可是也没有力量再爬，只好口中还“七咚七咚”的，倒在地上不动。

大家不知躺了好久才喘过气儿来。两个马来小姐儿先站起来了，头上的小髻歪歪在一边，脑门上还挂着许多小汗珠，脸上红红的，更显得好看。她们低声的说：“不玩了！坐火车比走道儿还累得慌，从此再也不坐火车了！”

小坡赶紧站起来，拦住她们；虽然是还没到吉隆坡，但是她们既不喜欢再坐火车，只好想些别的玩法吧。她们听了小坡甜甘的劝告，又拉着手儿坐下了。仙坡也抬起头儿问她谁是姐姐，谁是妹妹，于是她们又想起那未曾解决过的问题，忘了回家啦。

“来，说笑话吧！”小坡出了主意。

大家都赞成。南星虽没笑话可说，可也没反对，因为他有个好主意：等大家说完，他再照说一遍，也就行了。

他们坐成一个圆圈，都脸儿朝里，把脚放在一处，许多脚指头象一窝蜜蜂似的，你挤我，我挤你的乱动。

“谁先说呢？”小坡问。

没有人告奋勇。

“看谁的大拇脚指头最小，谁就先说。”三多——那个福建小孩儿——建议。

“对了！”仙坡明知自己的脚小，可是急于听笑话，所以用手遮着脚这样说。

南星也没等人家推举他，就拨着大伙儿的脚指，像老太太挑香蕉似的，检查起来。结果是两个马来小妞的最小，大家都鼓起掌欢迎她们说笑话。

两个小妞的脸蛋更红了，你看着我，我瞧着你，不知说什么好，也不知谁应当先说。嘀咕了半天，打算请姐姐先讲，可是根本弄不清谁是姐姐，于是又改成两个一齐说。她们看着地上，手摸弄着腿腕上的镯子，一齐细声细气的说：“有一回呀，有一回呀，有一个老虎……”

“不是，不是老虎，是鳄鱼！”

“不是鳄鱼，是老虎！”

“偏不是老虎，是鳄鱼！”

一个非说老虎不行，一个非讲鳄鱼不可。姐妹俩越说越急，头上的小髻都挤到一块，大家只听到：“老虎，鳄鱼，鳄鱼，老虎。”

南星鼓起掌来，他觉得这非常好听。平常人们说笑话，总是又长又复杂，钩儿弯儿的，老听不明白。你看她们说的多么清楚：老虎，鳄鱼，没有别的事儿。好！拚命鼓掌！

仙坡恐怕她们打起来，劝她们一个先说老虎，一个再说鳄鱼。她们不听，非一齐说不可；因为她们这两个笑话是一字不差记在心里的，可是独自个来说，是无论怎样也背不上来的。

大家看这个样儿，真有点不好办，全举起手来要说话。及至小坡问他们要说什么，又将手落下去，全一语不发啦。最后还是小坡提议：叫她们姐妹等一会儿再说，现在先请妹妹仙坡说一个，其实仙坡的笑话，他是久已听熟的，但是爱妹妹心切，所以把她提出来。大家也不知究竟听明白没有，又一

齐鼓掌。小印度姑娘不懂得怎样鼓掌，用手拍着脚心；心中纳闷：为什么她拍的没有别人那样响亮呢？

仙坡很感激大家鼓掌欢迎她，可是声明，她的嘴很小，恐怕说不好；大家都以为不成理由，而且南星居然想到：嘴小吃香蕉嘛，倒许吃得不痛快；说笑话嘛，恐怕嘴小比嘴大还好，他自己的嘴很大，然而永远不会说故事。

仙坡很客气的答应了他们，大家全屏气息声的听着。她先扭着头看了看椰树上琥珀色的半熟椰果，然后捻了捻辫上的红绒绳儿，又摸了摸脚背上的小黑痣儿。南星以为这就是说笑话，登时鼓起掌来。小坡有点不高兴，用脚指头夹了南星的胖腿肚子一下，南星赶紧停止了拍掌。

仙坡说了：

“有一回呀，有一只四眼儿虎……”

两个马来小妞，两个印度小儿一齐说了：“虎都是两只眼睛！”马来和印度都是出虎的地方，所以他们知道的详细。

仙坡把小嘴一撅，生了气：“不说了！”

印度小孩儿觉得有点不好意思，赶紧说：“你说的是两只虎。那自然是四个眼的。”

“呸！偏是一只老虎，四个眼睛！”仙坡的态度很强硬。

马来姐妹一齐低声问：“四个眼睛都长在什么地方呢？都长在脖子上？”说完，她们都遮嘴，低声笑了一阵。

仙坡回答不出，只好瞪了她们一眼。

三多忽然一时聪明，替仙坡说：“戴眼镜的老虎便是四眼虎！”

南星不明白话中的奥妙，只觉得糊涂得颇有趣味，又鼓起掌来。

仙坡不言语了。小坡试着想个好听的故事，替妹妹转转脸。不知为什么，除了四眼虎这个笑话，什么也想不起来。

大家请求印度小姑娘说，她也说了个虎的故事，而且只说了一半，把下半截儿忘了。

这时候，大家都想说，可是脑中只有虎，虎，虎，虎，谁也想不出新鲜事儿来。

最后南星自荐，给大家说了一个：

“有一回呀，有只四眼虎，还有只六眼虎，还有只——有只——七眼虎。”说到六只眼，他的“以二进”的本事完了，只能一只一只往上加了。一直说到：“还有只十八眼虎，”再也想不起：十八以后还是五十呢，还是十二呢。

想不起，便拉倒，于是他就秃头儿文章，忽然不说了。假如他不是自己给自己鼓掌，谁也想不到他是说完了。

(『中国名家经典童话—老舍选集』 同心出版社，北京，2009，pp. 47-56,.)

